大洲士の会　公開質問状への回答

1. 公共交通

（1）「ぐるりんおおず」について

大洲市内の循環バスである「ぐるりんおおず」は、高齢者の重要な足であるばかりでなく、今後はJRとの連携を考えれば、市内観光客にとって便利な足となります。

ひとつは、高齢者をはじめとする交通弱者への「福祉政策の一環」いまひとつは観光政策として早期の再開を図ります。

（2）交通弱者について

この質問は（4）とも関連付けてお答えします。

交通弱者と呼ばれる方への施策は、単に交通網を整えればいいというものではありません。ことに高齢者の病院への通院や買い物は、それぞれの生命・生活にかかわるものですが、そのコストについても十分に配慮する必要があります。

利用者にとってできるだけ低廉な乗合ワゴンや、ときにはタクシーの利用も可能とするように、福祉チケット制度も設けたいと考えています。

（3）地域でWin-Win

地域で乗用車所有者が、実費のみで交通弱者の利便性を保障する制度について考えます。地域でNPO を設立し、住民がその会員として交通弱者の送迎を行う事業を支援します。これは交通弱者に近しい人が自分たちで問題を解決するというものです。すでにこのような事業を行っているところもあり、県・国とも交渉の上、発足させたいと考えています。

（4）福祉チケット

（1）～（3）を経済的側面から支援する施策として、福祉チケット制度は早急に取り組むべきものと位置付けています。

2. 経済

（1）積極的な経済活動

経済活動を考えるにあたっては、大洲市の場合、あまり単純な対応では、その活性化は困難です。まずは若年人口の減少に対する施策が必要になります。

たとえば、福井県勝山市の小原集落の事例のように、ユニークな対応が求められます。ここは人口減少が著しくたった１名の集落になったところですが、横浜からの移住者やさまざまな活用事業で、定住人口の増加はないものの交流人口が年間1000人にまでなっています。

大洲市でも、多くの方の知恵を借りながら、これまでの企業誘致のような通り一遍の

施策ではなく、行政では対応しにくい施策をもさまざまな形で展開し、新しい経済活性化に着手します。その上で、起業等、若い世代の経済活動を支援します。

（2）原子力に代わるエネルギー

もはや原子力は安いエネルギーでもなければ、安全なエネルギーでもありません。しかし、エコといわれているエネルギーでも、大規模風力発電やメガソーラーと呼ばれる太陽光発電にはさまざまな問題があります。小規模な風力、太陽光、山間地の沢を利用する小水力のほか、バイオマスなども魅力的です。

今後の研究は必要ですが、諸外国の動きも参考にすれば、小地域でのエネルギー自給も議論に挙げられると思います。

（3）観光資源の活用

たしかに大洲市には多くのイベントがありますが、これまではいずれも一時的なもので、大洲市としてこれらをつなげた全体的なストーリーはありませんでした。

さらに、現在の観光は、かつての sight-seeing 的なものから自らが何かを行う doing へと変化しています。このように観光が doing になると、大洲市民の役割は、その先導役（ガイド）としての活動ということになります。たとえば「いもたき」も市民が訪れる方たちを歓待する形で展開します。

しかしながら、まず「隗より始めよ」で、大洲市民がさまざまな観光施策を楽しむことから始めます。「昼鵜飼い」も大洲市民が体験してこそ、市外の方にその面白さを吹聴できるからです。そのために市民特別価格も考えます。

（4）地域おこし協力隊

地域おこし協力隊を活用する以前に、地域が元気になるには、地域の中から地域を考える人たちが生まれることが前提になります。もちろんこのような人たちは地域絶対主義ではなく、他の地域との連携を考える人たちでなければなりません。

このような人たちが活動するには、何よりも「情報インフラ」の整備が必要になります。大洲市は合併により山間部が多くなっているとはいえ、地域を元気にするには、地域内外との情報のやり取りを密にしなければなりません。

このような情報の結節点として、地域おこし協力隊の人材は是非とも必要で、相互の情報ネットワークの確立が大切です。同時に、地域ごとに自主的に地域を考え行動する人材を最低 10 人ずつは育成したいと考えています。

（5）近郊のある都市計画

東大洲のようなナショナル展開をする店舗を集積するのは、比較的簡単です。その代わり、そのような地域は特色のないのっぺりとした街区となり、対外的にはあまり魅力

のないものとなります。

都市や海外の人々が魅力を感じる街区は、京都･奈良に代表される落ち着いて文化を感じさせるところです。このような街区は、つくられたイメージではなく自然な雰囲気が必要ですが、それを目玉的観光拠点ではなく、面としてどのように演出できるかが問われます。商店も個性的で洗練されたサービスがなければなりません。

いくつかの先行事例を参考にしながら、大洲の文化を大切にした街づくりに着手します。

３．子育て・教育

（１）子供の医療費助成について

今後の大洲市を真剣に考えるならば「子どもは宝」という発想が必要です。単に国策にのっとるのではなく、大洲市の将来を見据えた施策を展開します。

（２）夜間小児科対応

大洲市は病院数が多い割合に、小児科対応は不十分といわれています。小児救急もいざと言うときは松山まで搬送しなければならないというのでは、ちょっとなさけないではありませんか。このような状況は改善しなければなりません。最大限の努力を払います。

（３）学童保育

学童保育に関しては、行政対応だけでは十分とは言いきれません。保護者、行政と連携しながら、どうすれば満足の出来る体制となるか、一緒に考え実行していきます。

ともすると「子育て」が余り得意でない父親も、学童保育ではその能力を発揮することができます。父親も参加できる学童保育にしていきます。

（４）食育

食育は、基本的には地産地消が望ましいのは言うまでもありません。子どもたちの健全な発育のためには、それに加えて安全･安心な食材の利用が必要になります。

ただし、愛媛県の食育について先進地である今治の例では、子どもの頃に地産地消で育った子どもが大人になってもそれをつづけるかというと、そうではないという追跡調査があります。この意味で、他のさまざまな消費者教育と併せた食育を目指します。

しかし、地元企業の販路拡大と食育を結びつけるのは、やや疑問と言えます。「大洲市のええもんセレクション」は、大都市圏で販売できることが前提であり、それを大洲市内の小中学校の食育で用いることは、販路拡大とはならないからです。これらの販路拡大については、食育と切り離して行うこととします。

（5）大洲の歴史

地域の歴史を正しく理解させる教育は必要です。しかし地域を偏愛させる教育は偏狭な歴史認識を生み、結果として他者排除の風土をつくりかねません。それでは大洲市の今後の発展も望めません。幅広い視野をもちつつ、郷土に誇りを持つことのできる歴史教育を進めたいと考えています。

（6）中村修二博士

郷土の誇りとなる中村博士ですが、このような人材を輩出したのは、「自由な発想を是とする教育」ということができます。「自由な発想を可能とする教育」こそ大洲の教育であることを忘れないようにするため、博士の功績は継続的に顕彰したいと考えています。

4．スポーツ文化

（1）市民温水プール

市民の健康を支えるという意味での温水プールは実現したいと考えています。ことに高齢者にとって、プールでのウォーキングは、負担の少ない健康法であり、高齢化の進んでいる大洲市では、競技用プールというより健康増進のため温水プールこそ必要と考えます。

（2）大洲マラソン

大洲市の場合、マラソンといえども、50km ロードレースやフルマラソンのように、厳しいものではなく、「健康のためのマラソン･イベント」に徹するべきだと考えています。50km ロードレースやフルマラソンの場合、道路規制その他を考えると、費用便益では成立しがたいと考えます。むしろ、「健康をキーワード」に置き、全国ブランドになり得るマラソン･イベントを考えたいと思っています。

（3）ジュニア・トライアスロン

日本中の子どもたちが大洲市に目を向けるようなイベントとして実施します。現在子どもたちの世界でも、過剰と思われるほどの競争が強いられています。そこで、子どもたちにとって、ああいう楽しくゆるい大会なら参加したい・見学したいという形で実行します。

（4）大洲市民運動会

主に市域の山間部に近い地域の高齢化が進み、継続が困難になり休止に至っております。高齢化が進む大洲市では、年１回の競技対抗的な運動会は、必ずしも市民全体の健康増進とは結びついていないのも事実です。今後はコースや方法はいくつか考えるとし

て、春秋の市民ウォーキングといった形で市民の健康増進レクリエーションを創り出したいと思います。

（5）市民会館

老朽化した市民会館の建て替えについては、大洲市の歴史と文化を勘案して、なるべく早く実施したいと考えています。

問題は、運営ソフトをどうするかですが、コンサートから展覧会まで、伝統的なもの、市民参加的なもの、現代的なものと、大洲市の文化性を高めるものを積極的に展開します。

（6）指定文化財

大洲市にはさまざまな指定文化財が存在しますが、それぞれについてバラバラに紹介するのではなく、大洲市の歴史のなかに位置づけ、内外の多くの人の興味をかき立てるものとします。

できれば、大洲市版のおしゃれな文化財ガイドブックの発行や市民ガイドによる解説、文化財に関する市民講座などを行い、大洲市の歴史文化を広く知っていただきます。

5．外交

（1）近隣自治体との関係

大洲市は内子町とともに、人びとを南予に誘う入り口に位置しています。近隣自治体とは、南予の自然・文化の多様性を共同で発信し、「食」「宿」「こと（旅行その他）」に関して連携を図ります。また、この地域はいずれも過疎高齢化が進み、それに対応する施策が求められています。お互いが競合し合うのではなく、連携して新たな施策を実行する体制をつくります。

（2）友好都市との関係

友好都市との関係については、教育、観光、歴史などについての相互理解を深めるために、さまざまな交流を活発化します。このような大きな文脈の中で大洲市と友好都市とを位置づけるとともに、大洲市民にも、友好都市について十分に理解できるようにパンフレット等で積極的に紹介します。

6．その他

（1）文化力の大洲市

いま、富山県の舟橋村という人口が3000人、村域面積では日本一小さい村が注目を集めています。富山地方鉄道の越中舟橋駅に広い駐車場を設置し、車と列車とのパーク・アンド・ライドをしやすくして、同時に駅そのものに「図書館」を併設しています。この

ことが、この小さな村の人口増加の起爆剤になったといいます。21 世紀初頭から人口が倍増し、いまでは 15 歳未満人口が 22 パーセント近く、村の未来が明るいと評判になっています。

経済政策ではなく、図書館という文化政策が、人口増加をもたらしたのです。わたしは、直接的な経済政策もさることながら、大洲市を文化力で元気にして行きたいと考えています。

（2）女性が元気な大洲市をつくる

大洲市のさまざまな会合では、女性の姿が少ないように見えます。大洲市の人口の端数以上が女性です。女性が政治に対して意見が言いやすく、またその意見が政策・施策に結びつくように、大洲市女性フォーラムを立ち上げます。

（3）広報力の向上

お隣の内子町と比較すると、大洲市の広報力は十分とは言えません。今後、大都市はじめ市外の人たちに大洲市をアピールできる広報体制を整えます。